

# 市民の居住意識と 住みやすさ

横浜市民の居住環境に対する満足度は高い。市民の3人に2人が現在の居住環境に満足し、8割以上が横浜市内に定住したいと考えている。市民の暮らし方が多様化する中で、ライフステージ（子育て期や高齢期など人生の各段階）や年齢、家族構成に応じて、市民の居住環境に対する意識やニーズも明確に異なっており、多様な暮らし方を受けとめる居住環境のあり方を考えていく時代が訪れている。ここでは、市民意識調査や市民生活行動調査にもとづいて、横浜の居住環境に対して市民がどの点に満足し、またどんな点を重視しているのかをライフステージや世帯形態の相違に着目して考える。

## 市民の居住意識と定住意向

横浜市民の居住環境に対する満足度は比較的高く、それを反映して、横浜への定住意向も高いレベルで推移している。現在住んでいる場所の居住環境に満足している市民は65・9%、不満に思っている市民は22・4%となっており、市民の3人に2人が現在の居住環境に満足している（平成12年度市民生活行動調査）。

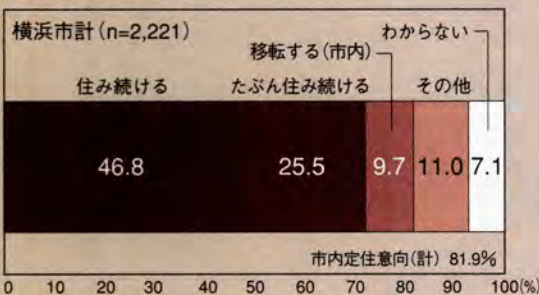
また、現在の住まいや周辺環境について「住みやすい」と感じている市民は84%に及ぶ一方、「住みにくい」と感じて

いる市民は15・7%で、市民の大半は現在の居住環境を住みやすいものと考えている（平成11年度市民意識調査）。

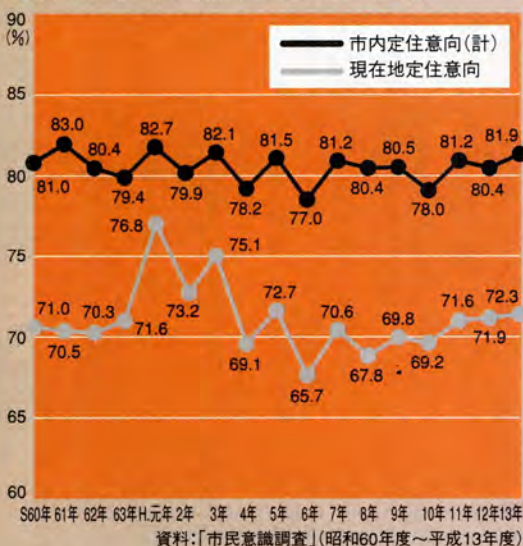
市民の定住意向を見ると、「今の住まいに住み続ける」と考える市民は72・3%に達し、また、横浜市内に住み続けたいと考える市民は81・9%に及んでおり、8割以上の市民が横浜への定住意向を持っている（平成13年度市民意識調査）。

市内定住意向はここ15年間、ほぼ80%前後を維持し続けている。現住地定住意向は、平成4年以降やや低下したが、ここ数年でふたたび70%以上になっている。

### ●市内定住意向



### ●現住地定住意向と市内定住意向の経年変化



**住みやすさ・居住環境への満足をつくる要因**

居住環境のよしあしを決める要素にはさまざまなものがある。現在の居住環境に対して市民は具体的にどんな点を重視し、どんな点に満足を感じているのだろうか。

生活する都市としての横浜への評価の特徴として、まず、交通や買い物、通勤や通院の便利さなどの「利便性に関する要因」を重視する市民の比率が高く、またそれに満足している市民は重視する人

の比率を上回って高くなっている。

さらに、周辺の静かさや、緑や自然・公園や緑地などオープンスペースの豊かさといった「アメニティ（うるおい）」に関する要因も、重視度が高く、満足度はそれを上回って高くなっている。

これに対して、防災や防犯、子供を安心して育てる環境など「安全性に関する要因」は、比較的重視されているにもかかわらず、満足度は低くなっている。

以上のことから、横浜は市民の居住意識からみると「交通や買い物物の利便さ」といった生活の利便性と「自然環境やオ

ーンスペースなどの豊かさ」といった生活のうるおいや快適さがバランス良く両立しつつある都市といえる。

一方で、さまざまな自然災害や犯罪などに対応した都市の危機管理に対する市民の関心が高まる中、「安全で安心して暮らせる」居住環境づくりがますます求められているといえよう。

**ライフステージや世帯形態で異なる満足度と重視点**

次に、ライフステージ、および誰と住んでいるかという世帯単位ごとの居住環境に対する市民の意識の違いを見てみよう。

まず居住環境全般に対する満足度では、満足度が高いのはおしなべて中高年層であるが、一人暮らしの市民（特に若年・中年層）は満足度が低く、不満足度が高い。特に若年層の未婚者では、一人暮らし層の満足度は低いが、親と同居している層では満足度は相対的に高くなっている。若年層のパラサイト・シングル化の原因を探る上でも興味深いものといえよう。

また、子どものいる夫婦では、未就学児のいる夫婦が、それ以上の子どもがいる夫婦より満足度が低くなっている。これは、学齢以前の子育てが、公園など身近な居住環境に依存する度合いが高くなるため、それだけ評価が切実になるからだと考えられる。

こうした居住環境全般に対する満足度の違いは、それぞれの市民層が居住環境のどのような点を重視し、どんな点に満足、不満を感じているかにも大きく関係している。

居住環境をつくる個別の要因への重視点と満足点を市民層ごとに見ると、まず若年單身層、若年夫婦層では、交通・買い物・通勤の利便さといった「利便性」を重視する傾向が強い。また中・高年單身、中・高年夫婦、学齢以上の子どもがいる夫婦では、「緑や自然の豊かさ」を重視する傾向が強く、年齢層と子どもの有無によって、重視する要因が異なることがわかる。

さらに、若年單身層では、交通・通勤の利便さで満足度が高いが、公園や緑地、教育・学習環境、近所づきあい、防災・防犯などで満足度が低い。

また、中年單身層では、交通・通勤の利便さ、飲食・ショッピングの利便さなどの満足度が高いが、自然の豊かさ、街並み、公園・緑地、近所づきあい、病院の利便さなどで満足度が低い。

これらによって、居住環境の利便性については満足度が高いものの、自然環境やオープンスペースなどの居住環境のうるおいや快適さには不満を感じ、人と人との顔の見える関係（家族・近隣関係等）などから生まれる安全・安心性には不安を抱えている一人暮らし層の姿が浮かび

**1 調査目的**

市民の生活行動を、居住、仕事、子育て、通院、買い物、余暇、地域活動、環境保全、防犯・防災など多角的な側面からとらえ、各生活分野における行動パターンを把握するとともに、市内・市外に及ぶ市民の行動圏の実態を分析した。また、各分野における満足度や要望・不満をとらえた。

**2 調査概要**

- 調査対象者……20歳以上の横浜市内在住の市民・男女
- 設定標本数……5,000人
- 標本抽出方法……住民基本台帳からの無作為抽出法
- 調査方法……質問紙（アンケート票）を用いた郵送によるマス・サンプル調査
- 調査実施時期……平成12年12月に調査票発送、回収
- 有効回収数……2,246票（回収率44.9%）
- 主な調査項目……居住環境／地域活動／環境・防災／仕事／学習・能力開発／育児・教育／高齢者の介護／通院／買い物／遊び・趣味・余暇活動／生活価値観・関心事／横浜の魅力と不満

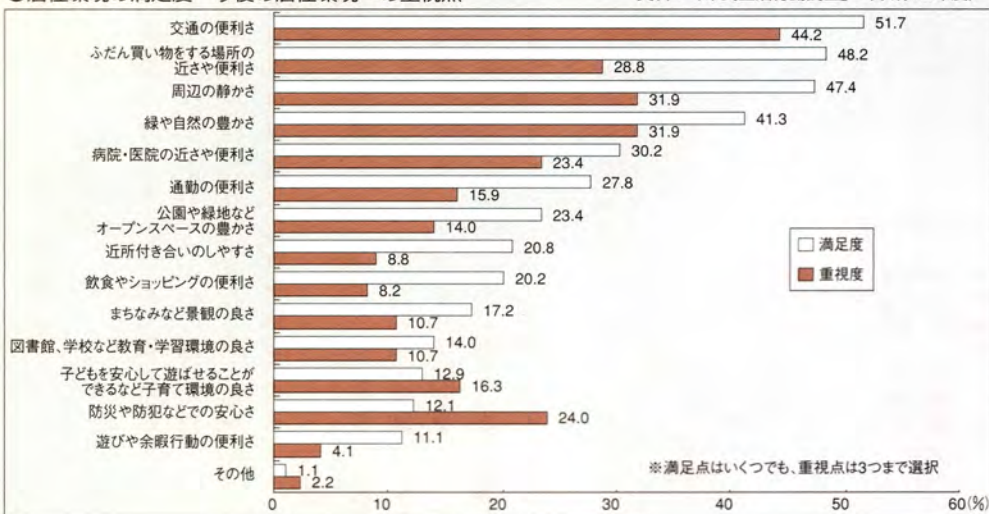
**3 ライフステージ別分析について**

本調査では、市民の世帯形態やライフステージの展開が多様化していることをふまえて、同一世帯に同居する家族や子どもの学齢などにより、対象者の中から以下の市民層を典型的な世帯形態・ライフステージをもつ層として抽出し、分析を行った。

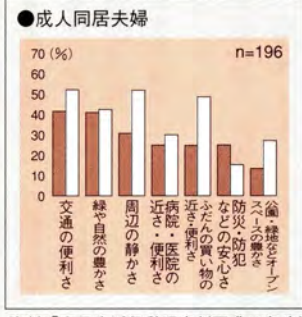
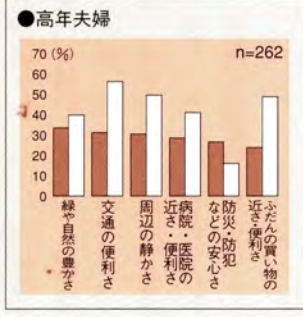
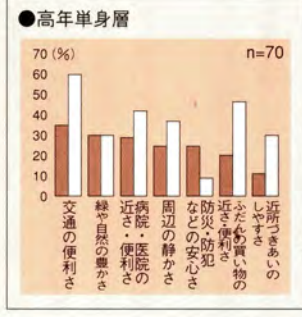
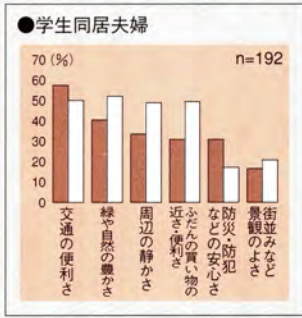
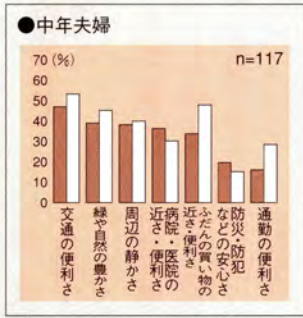
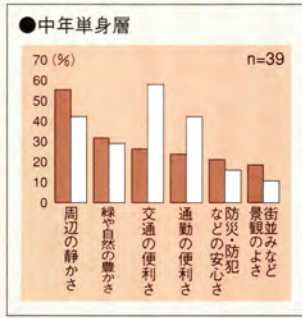
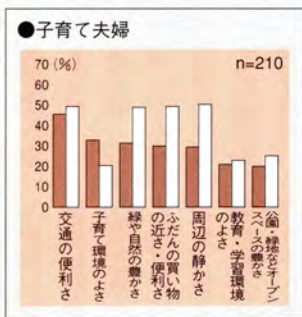
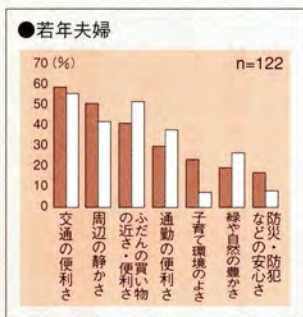
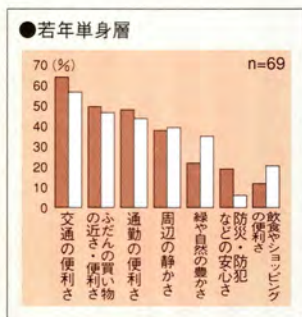
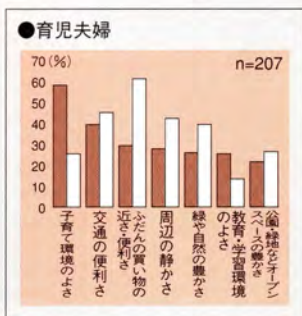
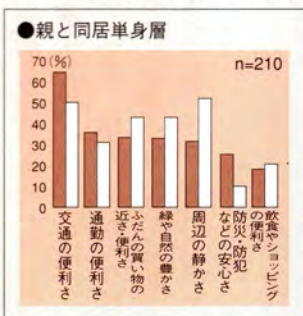
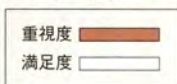
世帯形態	世帯形態	年齢	同居する子どもの学齢	サンプル数	本書での略称
未婚・離婚別	未婚で親と同居	20～39歳		210	親と同居单身層
		40～59歳		69	若年单身層
	一人暮らし	40～59歳		39	中年单身層
		60歳以上		70	高年单身層
既婚	夫婦二人暮らし	20～39歳		122	若年夫婦
		40～59歳		117	中年夫婦
		60歳以上		262	高年夫婦
	夫婦と子ども同居	20～59歳	未就学児	207	育児夫婦
			小中学生	210	子育て夫婦
			高校・大学生	192	学生同居夫婦
			社会人	196	成人同居夫婦

●居住環境の満足度—今後の居住環境への重視点

資料：「市民生活行動調査」(平成12年度)



●ライフステージ・世帯形態別にみた居住環境への重視点・満足点



資料：「市民生活行動調査」(平成12年度)

上がる。  
また、未就学児と小中学生の子どものいる夫婦では「公園・緑地などオープンスペースの豊かさ」や「子育て環境のよさ」を重視しているが、「子育て環境」では重視度の高さに比べて満足度は低い。

さらに、高年単身層や高年夫婦、高校生以上の大きな子どもがいる夫婦は、「防災や防犯などでの安心」や「病院・医院の近さ・便利さ」を比較的重視しているが、「病院・医院の近さ・便利さ」では満足度が重視度を上回る一方で、「防災・防犯」

では、満足度は重視度に及んでいない。少子高齢化が急速に進む中で、安心して子育てができ、高齢者層も安心して安全に暮らせる環境づくりの大切さがうかがえる結果となっている。

暮らし方が多様化する中で、居住環境に対する市民の関心や重視する事柄も異なっており、市民のライフステージや多様なニーズに対応した施策展開が求められているといえよう。